



だて歴史文化ミュージアム講演会

講演要旨
【博物館】

令和元年11月23日にだて歴史文化ミュージアム・ラーニング・スタジオにて、「伊達騒動のリアルとフィクション」と題し、NHK大河ドラマ「新選組!」「篤姫」「花燃ゆ」などの時代考証を担当された大石学氏（独立行政法人日本芸術文化振興会監事）にご講演いただきました。江戸時代の文化や社会のリアルを多くの文献からご解説されると同時に、「伊達騒動」という仙台藩の御家騒動を題材にした歌舞伎「伽羅先代萩」の映像を交えながら、フィクションの表裏について、ご講演いただきました。



〈講演〉伊達騒動のリアルとフィクション

独立行政法人日本芸術文化振興会監事 大石 学 氏

万治3年（1660）、陸奥国仙台藩で伊達騒動といわれる御家騒動が起こりました（仙台藩では寛文事件ともいう）。当時、藩主伊達綱宗の隠居後、2歳の亀千代（綱村）に家督が譲られ、同時に綱宗の叔父伊達兵部少輔宗勝（政宗10男）が亀千代の後見を命じられ、実権を握ることになりました。その際、奉行の原田甲斐らと結び藩権力の集権化をはかる兵部と、自主性の強い地方知行制を維持しようとする伊達氏一門衆が対立したことに起因します。この出来事は、後に歌舞伎の演目「めいぼくせんだいはぎ伽羅先代萩」や、山本周五郎の小説「樅ノ木は残った」などの題材になりました。

今日はこの伊達騒動を演題とした歌舞伎のシーンから、再評価されつつある江戸時代の姿を考えてみたいと思います。

テレビドラマなどでは、勸善懲惡史観のもと、正義の味方が、バッサバッサと悪人を切り捨てるという伝統的なチャンバラストーリーが描かれてきました。たとえば、水戸黄門、暴れん坊将軍、遠山金四郎などがそれです。しかし、現実の江戸時代では、理由なく抜刀したり相手を切り捨てたりすると、刑罰の対象となり、テレビドラマの世界とは大きく異なっていました。

そこで、リアル江戸時代をみてみます。注目するは「平和」と「文明化」という二つのポイントです。

慶長8年(1603)から慶応3年(1867)までの足かけ265年にわたる『徳川日本(Tokugawa Japan)』=『江戸時代』は、その大部分が、国内・対外的に戦争のない『徳川の平和Pax Tokugawana』とよばれる『平和』で『文明化』した時代でした。

それ以前、16世紀の約100年にわたる戦国時代は、多くの武将・英雄を生み出しました。しかし彼ら戦国の勝利者は、いうならば、より多く人を殺し土地を奪った人物たちでした。こうした価値の戦国時代を克服し、「平和」の時代=江戸時代に入ると、これらの行為は犯罪とされます。武器は国家規模で管理され、唯一武器の保持を認められた武士たちでさえも、自らの判断で勝手に武器を使用することを禁止されたのです。それは日本を訪れた外国人にも驚きを持って評価されています。

たとえば、フランス海軍士官のE.スエンソンは「帯刀した者たちの間で流血事件が起きたと耳にするのはめったになく、この國の人間の性來の善良さと礼儀正しさを存分に物語っている」（『江戸幕末滞在記』デンマーク人1866年來日）と書き残しています。また、外交官のルドルフ・リンダウは「日本という国は、あらゆる文明國の中でも、武器を持つ習慣が最も広まっている国であるので、その危険な習慣の不都合を出来るかぎり避けるために、厳しい規則を採用せざるを得なかった。正当防衛以

外の場合でなければ、路上で何人も刀を抜けば、決まってこの上なく重い罪に問われる所以である……槍の刃先、銃の銃口さえもが丁寧に鞘に包まれているのは、平和時に、なんなれど武器を人の目に曝すことを禁じている厳しい禁止命令のためなのである。敵国に遠征するときにしか鞘は外されないのである。」（『スイス領事の見た幕末日本』1861年から3度来日）

この『平和』に注目することにより、江戸時代のイメージは、従来の近代社会との断絶面に注目する『封建制』、すなわち、領主（武士）の抑圧・収奪面の強調から、近代との連続面を評価する『初期近代（アーリーモダン）』、すなわち近代の準備、近代化の第一歩と、捉えられるようになったのです。

つまり江戸時代の領主である武士は、兵農分離や転封政策によって在地性を失い官僚化し、領地の民衆（農民）とは、文書主義・契約主義など恣意がはたらきにくいシステムが形成されました。民衆の一揆・騒動なども、領内不取締りとして御家断絶など

の処罰の理由となるため、安全第一、御家第一の前例主義や横並び主義の官僚的支配が普及していったのです。しかしながら多くの武士たちは、自領地からの年貢ではなく、幕府や藩から蔵米（サラリー）を与えて任務を遂行する存在となりました。武士が権利として武力を発動する『チャンバラ』は、現実のシーンから消えていったのです。

そして、この『徳川の平和』を基礎から支えたのが、『江戸の教育力』です。『江戸の教育力』は、武力による問題解決を禁止し、訴訟裁判という解決方法を明示し、社会を『平和』『文明化』させたのです。江戸時代の武器不使用や教育普及にもとづく秩序維持は、世界を見てきた多くの来日外国人が高く評価するところです。

では、伊達騒動を題材にした「伽羅先代戒」のシーンから、武力ではなく証拠と書類によって成敗される様子を見てみましょう。

この演目では伊達家ではなく奥州の足利家を舞台としています。足利家の執権・仁木弾正や妹・八汐

伽羅先代戒 登場人物

足利頼兼【あしかがよりかね】

奥州の大名。叔父の鬼貫ら逆臣方にはめられて隠居させられる。

足利鶴千代【あしかがつるちよ】

まだ幼いが、逆臣方の計略により父・頼兼が隠居させられたため足利家の当主となった。

大江鬼貫【おおえのおにつら】

頼兼の叔父で、足利家の乗っ取りを企む典型的な「叔父敵」の役。仁木や黒沢官蔵らとともに策をめぐらして情勢優位に展開していくが、勝元の裁決により敗北する。

仁木弾正【にっくだんじょう】

足利家の家老だが妖術使いでもある。お家乗っ取りを企む鬼貫らと結託し、一派の中心人物となっている。渡辺外記左衛門ら忠臣方の反攻にあい、細川勝元の裁決によって敗北が決定。最後は外記に討たれる。典型的な「実悪」の役柄。

細川勝元【ほそかわかつもと】

問注所を束ね、裁判官の役割を果たす管領の一人。年齢は若いが公平な人物で、山名が外記らに対して下した裁決をいったんは支持する態度を見せながら、弁舌さわやかに仁木らを徐々に追いつめ、ついにはその罪を暴いて忠臣方勝利の裁決を下す。

山名宗全【やまなそうぜん】

もう一人の管領で逆臣方に肩入れしており、勝元の留守中に裁判を行い、渡辺民部が提出した証拠をろくに見ないで焼き捨てるなど、不公平な裁決を下す。

渡辺外記左衛門【わたなべげきざえもん】

足利家の忠義な老臣。仁木や鬼貫らによるお家乗っ取りを阻止すべく、息子の民部らとともに問注所に訴え出る。対決は勝元による急転直下の裁決で勝利し安堵するが、最後の抵抗を試みた仁木に刺され、足利家の繁栄を願いながら息を引き取る。

らが、足利家の乗っ取りを企む物語です。足利家家督争いに、悪人弾正から鶴千代を擁護する渡辺外記が幕府に訴え出たため、弾正一味の御家横領の件は幕府問注所の裁決を受けることになります。しかし、裁き役は悪人方の山名宗全だけでした。これでは、渡辺外記がどんなに頑張っても結果は明白です。実際、評定は山名が証拠の品を燃やすなど悪人方が有利に進めます。もはや忠臣たちの命運は尽きたかに見えたその時、細川勝元が出座します。

勝元は、表面上は渡辺外記たちを叱りつけ、「判断は変わらない」と言いながら、「主君の放埒を知らなかつた」と言い切る弾正を「職務怠慢だ」とやりこめます。そして弾正らには、鶴千代の後見人を弾正の派閥から出すために幕府に上告書を出すように言います。弾正是その場で上告書を書きますが、勝元は「実印を押せ」と言います。用心深い弾正是、自分の実印は陰謀にかかわる密書にあちこち押しているので、瞬時に髪の毛をひと房抜いて紙の上に置き、その上から実印を押して「偽装」します。

こうすれば印の形がかずれるので証拠になりにくいと思ったのです。

勝元は、弾正の陰謀にかかわるあやしい文書を持ち出してこれについて問いただすと、それは「実印の形が違う」と言い逃れします。しかし勝元は、さきほど弾正が髪の毛を下にしいて捺印したのを見ていたので、「公文書の実印に工作をするとはけしからん」と弾正をやりこめます。このようにして、聰明な勝元の裁きによって、評定は一転、外記たち忠臣の勝利となつたのでした。

ここからわかるのは、証拠書類をもとに事実関係を突き詰め、裁きが行われたということです。しかもこれは歌舞伎の演目として江戸の庶民が楽しんでいた演目ですので、劇中の社会制度は共感できているはずです。そして勝利を勝ち取るために偽装することが罪であることがわかります。江戸が遠い時代ではなく、私たちの現代社会と地続きの世界であることを感じてもらえば、リアル江戸時代が見えてくるのではないかでしょうか。

